



巻頭言

科学 と ロ マ ン

安 東 滋*

まず誤解のないように、ロマンとは元はフランス語で物語、長編小説という意味だそうであるが、われわれが今日、“ロマンがある”と言うときは、“ロマンチックだ”と言うのと同じ意味だと思う。科学は一見、ロマンと無縁のようにも思えるが、半年前の巻頭言に武者さんが書いておられる“論文の面白さ”(光学 18 (1989) 1) は、このロマンに通じる点があると思う。

科学とロマンを意識的に結び付けた例は決して少なくないが、比較的新しい例として SF 作家の J.P. ホーガンとグレゴリー・ベンフォードの作品を挙げたいと思う。ホーガンの“星を継ぐもの”(東京創元社刊)に続く3部作などは、物理学、遺伝学、コンピュータ、社会学など最先端の問題も取り入れた壮大なロマンだと思う。また、ベンフォードは自身が理論物理学者で、研究対象のタキオンを採り上げて時間論や宇宙進化論も含む壮大な物語を展開している。(“タイムスケープ”早川書房刊)。いずれも、武者さんが述べられた面白さのための条件、たとえば“意外性”や“どんでん返し”を備えているのは、まさに凶星である。

私事で恐縮であるが、筆者が大学を卒業した昭和 27 年は、シャノンの情報理論が発表されたあと、通信理論の体系がほぼ今日の姿に近づき、それが光学の分野にもどんどん影響を与え始めた頃であった。この通信理論と光学のアナロジーは、結構、意外性も備えていて、われわれ初学者の目から見て、光学の前途にバラ色の未来を感じさせたものである。そしてそのあと、オプトエレクトロニクス、量子エレクトロニクスおよびレーザーと続き、筆者が会社生活を終えてしばらく後に、光産業の生産額が1兆円を越す時代がやってきた(昭和 63 年春にまとめられた光産業技術振興協会の報告によると光産業の生産金額が1兆円を越したのは昭和 61 年度からである)。大学へ移って間もなく 10 年近くになるが、最近では、生体の情報処理システム、とくに視覚情報処理の仕組みなどが薄紙を一枚一枚はがすように少しずつ解明されていく動向に胸をときめかせながら注目している。

武者さんが述べられたような意味で面白い1編の論文というのは、確かに存在し、私も何編か尊敬の念をこめて挙げるができる。しかし、筆者自身のも含め大多数の論文がその1編だけでは面白いとは言えないことも事実であろう。そこで、次のような独断と偏見に満ちた結論を筆者なりに導いた次第である。“ロマンは、科学論文には必ずしも必要ないが、科学者自身の生きる糧として必要である”。